

## 会議結果

会議名 (審議会等)	令和7年度 高砂市子ども・子育て・若者会議 第2回若者部会
開催日時	令和7年11月13日 18時00分から19時45分
場所	高砂市役所 南庁舎5階 大会議室
会議公表	<input checked="" type="checkbox"/> 公開(傍聴者定員数:3人)(傍聴者数:0人) <input type="checkbox"/> 非公開
事務局 (担当課)	政策部シティプロモーション室(TEL 079-441-9904)
議題	(1)第2期高砂市子ども・子育て・若者支援プランについて (2)その他
出席委員	委員5名(欠席2名)
結果(議事録又は議事概要)	
発言者	内容
事務局	<p>開会 資料確認、出席者紹介</p> <p>議題 (1) 第2期高砂市子ども・子育て・若者支援プランについて 【事務局から、第2期子ども・子育て・若者支援プラン、資料1「地域との関わり」について説明】</p>
部会長	子ども食堂のコーディネーターの方は1人ですか。
事務局	特定非営利活動法人に事業委託をしており、1人ではなく複数名です。
委員	着実に子ども食堂ができてきて、13ヶ所あるのはすごいと思います。全小学校区の中で未設置の4ヶ所の開設を目指しているということですが、開設をするのに、何が一番難しいのか、ハードルが高いのは、例えなどのようなことか。
事務局	まず、実施場所です。次に、人をどう集めるかということ。小学校区は10あり、地域交流センターのような調理室のある公共施設がない小学校区は、なかなか開設が難しい状況になっています。ボランティアの方で、主になってやりたいという方はおられるが、そこからどう展開していくかという問題と、食事の提供以

	外のこどもと話をしたり遊んだりという場を作っていくという問題です。食事を作るスタッフだけでなく、プラスアルファの人員が必要ということをコーディネーターとの話をする中で気付き、そこをどうしていくかが、困っているところと聞いています。
部会長	当初関わってきた人が、今スタッフになっているような子ども食堂は、当初 2ヶ所、その後 4ヶ所ですね。それは歴史が古いところに限られているものですか。
事務局	コロナ禍で新規開設が難しい時期があり、開設時期が多いのが令和 3 年～4 年になっています。それより前に開設されたところは、小学生が高校生になってということがあります。最近開設したところはまだそこまでの状況にはなっていません。
委員	全ての学校区に子ども食堂ができる、居場所としての役割もあるので、13ヶ所まで増えているのはとても良いことだと思います。先ほど例にあった、当初のメンバーがスタッフになっている、県立大学の大学生がゼミ単位で入っているというのは嬉しいなと思っています。13ヶ所設置をし、残りが 4ヶ所で 17ヶ所全てに設置できたらいいとは思います。実情としてそれぞれの開催頻度と、参加人数はどれくらいか。例えば曾根・米田が最初に始めたところなら、やはり多い傾向にあるのか、教えていただきたい。
事務局	開催頻度ですが、元々認証事業として補助をする要件として、月 1回は開催をお願いしています。ボランティアで運営しているので、今のところ月 1回以上開催できている団体は 1つか 2つ、月 1回開催するのが限界だというお声を聞いています。参加人数は、平均すると 20～30 名の参加が多いです。地区で多い少ないがあるよりも、団体で 20～30 人と規模を決めているところが多いので、それほど差は見られない状況です。
委員	どこの地域でも 20～30 名が集まるのはすごいですね。
事務局	最初、開設する際にこどもをどうやって集めるのか、ボランティアの方にはノウハウがありません。そこに学童保育を市内全校区で運営されている特定非営利活動法人に入っていただき、例えば土曜日に開催しているところであれば、土曜日に学童保育に行くこどもたちと一緒に行かせてもらい、盛り上げることができるので、コーディネーターが入っていただいた利点だと思います。

委員	今の小学生のこどもたちにとって、子ども食堂は身近なのでしょうか。
事務局	そうですね。ただ、来るこどもが固定されている傾向があります。毎回毎月違うこどもが入れ替わり立ち替わりというわけではなく、そういうコアなこどもたちの居場所にはなっていると思います。
委員	最初のスタートの時点で、食事に困っている、貧困、そういうこどもたちの食を保障しようというスタンスで始まり、それが今、居場所になっている。困っている子だけというのは、何かすごくネガティブで、差別化みたいな感じになってしまって、誰でも参加できる、事情を抱えたこどもたちも一緒に参加できるユニバーサルな感じになれば一番理想だと思います。事情を抱えたお子さんでも参加しやすいのか、逆に、事情のあるこどもが参加していないくて、居場所という意味合いがメインになっているのか、どちらなのでしょう。
事務局	子ども食堂によってカラーがあります。例えば曾根の団体だと、地域の困りごとを抱えているこどもに声を掛けて、子ども食堂と一緒にに行って、関係性をつないでいるという事例もありますし、イベント的に大規模でやっている子ども食堂だと、本当に楽しく居場所みたいな感じです。困っているこどもの場所というイメージが払拭されたことにより、行きやすくなっていると思います。一番良いのは、みんなの居場所の中に困りごとを抱えたこどもたちもいて、スタッフと話をして支援の方に繋ぐ。繋がらなかったとしても、月1回自分を出せる場所があると思ってくれて、困りごとを抱えた子も一緒にいるというような空間が一番望ましいと思っています。
部会長	どんな風に困りごとがあるこどもたちを把握していくのか、表に出さないので外見や話だけでは分からない。それは学生も同じで、大学生や大人も同じで、もしかしたら、社会人もそうかもしれない。そこをどうしていくのか、コーディネーターや、主催者の方に何か意識してもらうことがあればいいなと思います。
事務局	こどもの相談窓口が昨年度からできており、困りごとを抱えた家庭の情報が入ってきます。その中で食事に困っている家庭がありましたら、担当より「この地区は、次はいつどこで子ども食堂をやっているのか」との問い合わせがありますので、開催予定をお伝えしています。
事務局	【事務局から、第2期子ども・子育て・若者支援プラン、資料1「若者支援」について説明】

委員	子どもと大人の間の、私たち若者の世代がぽっかりと抜けていると思いました。ぜひ、私たちの世代を入れていただきたいと思います。大人の枠に収まらないからこそ、近い距離で接し、色々な活動ができるというのは、私自身も今まで学生団体で経験しています。学生団体は見方を変えるとただの仲良しクラブになってしまいます。法人格を持たない学生団体も多く、難しいとは思います。例えば、約款がありしっかりしている団体だと、助成金をもらえる際に提出しますので、ある程度組織化出来ている団体も多いと思います。例えば、私が普段行っている防災教育は十分な社会教育になると思います。実施するのが大人ではなく、学生なだけ。ただ、大人でも防災の知識のない人も多く、たまたま専門に防災を学んでいる大学生が、多くの方に対して行う教育という面では、社会教育に当てはまるのではないかと思う。なかなか難しいところだと思うが、ぜひ変えてもらいたいです。
委員	若者が運営している団体は、社会教育関連団体になっていないのかをお聞きしたく、社会教育や社会教育関連団体とはそもそもどういうことだろうと。文科省のホームページを見ると、「社会教育とは、学校の教育課程として行われる教育活動を除いて、青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動である。」と。社会教育関係団体とは「社会教育に関する事業を主たる目的とする、公の支配に属さない自主的・自立した団体」ということで、社会教育は、趣味やスポーツも含まれるとなると、学生団体は驚くと思います。先ほどの説明を聞いて、若者が運営している団体は、大人がやっている団体に比べて、信頼性がないという風な印象を受けたのですがいかがですか。
事務局	そういうつもりでは言っておりませんが、手続き的なことで受けるメリットというのが減免で、施設の使用料が半額になります。施設が若者の使う場所でなければ来ないでしょうし、こちらの周知も足りていないところもあり、若者が社会教育関連団体になることで自分達の活動にどう役に立つか、というところが伝えきれていないかもしれません。
委員	私は総合体育館を減免してもらえた助かります。子どもたちを集めて1日防災キャンプをすると、人も集まると思います。そういうことをしたいと思って、高砂市に問い合わせをしたことがあります。結局それがどの課が担当なのか。体育館の管理はまた別の課で、こどもたちも学校は教育の課と、なかなか一環で調整出来ない。せっかく前例として、大人のPTA、子供会、レクリエーション協会とか、色々なことをされている大人の団体さんがあると思うので、それら団体と学生団体を繋いで欲しいと思う。先ほどの子ども食堂の話もそうだが、食

	事を提供するまではできるが、その後の賑やかで困っているのであれば、使い方を覚える目的として、水消火器を使って的当てゲームをやるなど、何かレクリエーションという形で協力することもできます。小さい力ですが、子どもたちと近い世代で、大きい力を持っていると思います。なので、そこをマッチングさせて欲しいです。ぜひ、高砂市周辺とか、少しだけでも条件を緩めていただけると、参加しやすくなると思うので、ぜひ頑張って欲しいと思います。全世代が色々関われる青少年の仲間づくりや、ボイイスカウトがしているところにも、外部の団体が一緒に関わっていけるとすごくいい。その一助に、高砂市はつなぎ役として、担い手になっていただきたいと思っています。
部会長	私自身も経験があるのですが、地域の中に大学があっても、なかなか地域に出て行くのは難しいです。そのつなぎ手として、商工会議所の地域の色々な事情をよく知っておられる方が、空き店舗が増えている、それなら空き店舗を使って何かやらないかというので、ギャラリーをやったり、イベントをやったりと、とても広がりました。地域のことをご存知のコーディネーターというか、つなぎ役の人が市役所にいたら、ぜひやってもらいたいなと思いました。
事務局	【事務局から、第2期子ども・子育て・若者支援プラン、資料1「就業」について説明】
部会長	地元で働きたい人と企業をマッチングさせるこの合同就職面接会というのは、先ほど 20 社くらいの企業が参加ということですが、開催頻度はどのくらいですか。
事務局	年 1 回です。企業が集まってブースを設け、求職者に担当者が会社の説明をして、求職者が応募をしたいとなった場合には、日程調整を行って後日面接を行っています。
部会長	地元で働きたいというようなニーズは多いのですか。
事務局	参加者を見る限りは、やはり高砂市で働きたいという方はそれなりにニーズがあります。企業の人手不足に役に立つ事業をするため、合同就職面接会は市や企業にとってもいい機会であると考えています。
委員	当日、行ってみないとどの企業が参加しているのか分からぬのですか。

事務局	参加企業は事前にホームページに掲載していますが、どういう事業をしている会社なのは掲載していません。
委員	10代後半から20代前半ぐらいがターゲットになっていると思うのですが、実際に合同就職面接&相談会の広報は、ホームページで作成し、そのホームページをどのようにして広報をしていますか。チラシを作っているのであれば、そのチラシをどのように広報しているのでしょうか。
事務局	チラシやポスター、市のホームページやSNSなどで広報を行っています。
部会長	企業の求める年齢層や再就職、中途採用の方ではどのような年代が多いのでしょうか。
事務局	一般求職者ということで、年齢制限は設けておりません。3月に学校を卒業する方から上は制限なしになります。一時期は就職氷河期の方を分けていましたが、現在は一般求職者のみとなっております。
部会長	ターゲットがあるのであれば、若い人向けに学校に求人票や案内を送るなどしたらどうかと思ったのですが、幅広くということでしたので、会社の情報が分かった方がいいのではないかと思います。おそらく地元の企業は採用したいと思っているでしょうから、「うちの会社は長く高砂市でこんなことしています。」とか「即戦力」とか何かキャッチコピーのようなものが、ホームページやチラシにも必要ではないかと思いました。
委員	事前周知があればインパクトも違うし、短い文だけでも違うかと思う。他の自治体の事例で、こんな取組みをしているというものはありますか。
事務局	播磨町が企業紹介の冊子を事前に作成していますね。見せてもらって、いいなと思いましたが、あそこまで詳しく掲載するとなると、商工会議所に協力してもらう必要があります。担当の方に聞いたところ、全てを役場で作っているわけではないとのことでした。
事務局	話が戻りますが、近隣の大学や商業施設にはチラシを配っております。専門学校や学生さんが集まるような場所には10部ずつ配布しております。
委員	大学にポスターは配布できないものなのですか。

事務局	ポスターは1部ずつではありますが配布しております。
委員	高砂市には優良企業がたくさんあると思うのですが、やはり学生は、都市部や有名な企業、よく耳にするところにどうしても行きたがり、優良企業なのになかなか学生の目が向かないというところが、残念に思います。チラシなどをお配りいただいても、全体に広報するというよりは、必要に応じて学生支援課に行った学生がもらうという感じで、行かなければ目にしないので、色々な学生が目にする機会があれば、企業にとっても学生にとってもお互いに良い状況になると思います。
事務局	【事務局から、第2期子ども・子育て・若者支援プラン、資料1「ひきこもり支援」について説明】
委員	取組みとして、小学校にもサポートを広げて結果も出ているので、高砂市はとても頑張っておられるなど。私も元教員なので、昔の考え方で言うと、学校に来てクラスにおいて欲しいとは思うのですが、今は子どもたちに一律のことを求めると、やはりしんどいのかなと思います。色々と学べる場や、学校の中のオアシスになるような場などが用意されて、そこでエネルギーを蓄えていくという仕組みが必要な時代なのかなと。1つに合わせてしまうと上手くいかないと思うので、高砂市が行われている取組みは必要な取組みだと思います。学校に行けない子でも、のびのび教室やサテライトへ行く中で、社会と繋がっていき、高校の通信教育やいろいろな受け皿が出てきているので、補完するような、自分に合った、自分にとってよりよい生き方をしながら、将来引きこもらず、社会の色々なヘルプを得ながら自立していくけるというのを目指していけたらいいのかと思います。今後どうなっていくか楽しみに聞かせていただきました。
部会長	ひきこもり支援や学校卒業後の支援というのは、地域福祉課が管轄になるのでしょうか。
事務局	本当に困ってしまって、ヘルプを出すところは地域福祉課になりますね。高砂市のひきこもりの率が少し高めということを昨年ご報告しました。孤独かといわれると、孤独を感じていないという方もおられ、その中に宙ぶらりんの方がいるのか。また、その方は困っていて幸せではないのかというと、そうでもなさそう。本当に大変になってところへのサポートは用意しているのですが、支援を求めていない場合どこまでいけるのか。門戸が地域、市役所、個人も含め、オープンになつていれば、そういう人たちも関わって、つながりができる、もっと幸せになつ

	ていけばと感じています。
委員	大人のひきこもりはずっと自宅にひきこもっている場合が多いですよね。ただ、高砂市は近隣住民との距離が近い地区が多いので、例えば近所の人とは仲がいいとか、ごみ捨ての手伝いはちゃんとするという人たちもいると思います。類似した例だと、能登半島に災害支援を行っていると、避難所の運営は行政の方がしますが、自主避難所の場合は市民が運営をします。そうすると、1つ面白い例で、ひきこもりだった人が、地域との繋がりは強いから、誰々さんに言えば何ができるというのが全部分かっていて、ボランティアセンター、いわゆる自主避難所のセンター長をやり、最終的には上手くいったという事例がありました。ひきこもりという言葉だけ聞くと、部屋にいるだけというイメージを持たれる方も多いと思うのですが、そうではなくて地域との繋がりが強いなど、何かその人なりの特色が生かせれるといいなと思いました。
委員	方針として、サポートルームやのびのび教室、南庁舎でサテライト教室をされているという話でしたが、例えば、小学生でサポートルームなどに来ている子たちは、最終的に中学生に上がるタイミング、またはその後、みんなと同じクラスに戻る、復帰することを目的としているのですか。それとも、色々な受け入れ体制があるので、本人が希望するサポートでいくのかというのは、方針として1本ではないと思いますが、どちらの方が多いのでしょうか。
事務局	子どもによって違いますが、学校教育課としては学校の方に戻ってほしい、教室に入ってきてほしいというのがあるので、そこを目指しています。なので、ここに行っている子たちが学校に戻っていくよう、先生方も教室が居やすい場所となることを目指しています。ただ、子どもたちにも色々な方向があるので、そこも認めながら、という運営になっています。
委員	例えば、普通の高校に行かずに、通信制の高校に行きます。そういう方向性を希望した場合、市がそこに繋がるようにサポートしたりはしているのですか。
事務局	中学卒業後の進路に関しては自分達で選ぶものです。どこをどう選ぶのかや、「ここに行きなさい」ということはこちらからは言えないでの、家族で話をしてもらうという形になります。
事務局	(2)その他

	【令和6年度若者支援計画に係る施策評価シート、当日資料「資料の施策番号1-2-2 地域若者サポートステーションとの連携の令和6年度の実績」について説明】
部会長	今回のテーマにはありませんが、情報発信や連携は、これまであまり行政でやってきていないところかもしれません。そこはやはり、進めてもらいたいなと思います。他の今日4つ挙げていただいたテーマにも全部関連していることかと思います。情報発信については、ずっと言っているところだと思いますので、そこは私たちも含めて何かできればと思います。
委員	先ほどの就職相談会というのはお堅い感じがするのですが、いま大学に「知るカフェ」というところがあって、就活の情報や動画などを見ることもでき、話しがあれば学生は無料ドリンクやポイントがもらえます。年齢の近い先輩たちに、就活についての相談もできます。高砂市でも就活が終わった方や地元企業の方とやんわりした雰囲気で話せるような場があれば行きやすいなと思いました。
部会長	他に意見はありますでしょうか。 それでは進行を事務局にお返しします。ありがとうございました。
事務局	【事務局から、今年度の会議について説明】 部長挨拶  【閉会】